

私の研究史〈篠原 武夫〉

東南アジア・オセアニアと日本の 林業研究の架け橋を目指して

聞き手：前田千春*、大田伊久雄**

日 時：2017年6月29日、同10月13日

場 所：沖縄県浦添市（ご自宅）

はじめに

私は、1941年4月に石垣島で生まれました。篠原という姓は沖縄にはほとんど見られませんが、それは私のルーツが広島だからです。私の祖父は広島の国泰寺出身で、17歳の頃に有志7名ほどで西郷隆盛を応援すべく西南戦争に参戦したものの西郷軍敗戦で行き場を失い、密航して南へと逃げ延びたということです。やがて沖縄本島を経て宮古島に渡り、現地の女性と結婚してそこに落ち着きます。その後は宮古と八重山を転々としながら大工のようなことをして生計を立て、一人息子である私の父を育てました。

父は若い頃には当時日本の植民地となっていた台湾北部の港町基隆で呉服屋に勤めるなどしていましたが、その後八重山に戻り、戦後は復興のための木材を西表島で伐採して石垣島の製材工場に納めるという素材生産関係の仕事をしていました。島から島への運搬には沖縄ではやんばる船と呼ばれていた小さな帆船を使い、陸上での輸送は和牛（黒牛）や水牛に引かせていました。小さい頃に兄と一緒に草を刈って牛の餌やりをしたことを思い出します。

戦争中に母親をマラリアで亡くしていましたので、とても貧しい暮らし向きでした。琉球政府立八重山農林高等学校林業科に入りましたが、勉強が好きで成績も良かったので、高校卒業後の1962年に琉球大学農家政工学部林学科に進学することができました。高校時代の英語の先生がとても優秀な方で、その影響で英語が好きになり、ラジオ講座を聴くなどしてよく勉強しました。

学生時代

その当時の琉球大学は沖縄戦で廃墟となった首里城跡の丘の上にあり、激しい砲撃の爪痕がまだいくつも残っているようなところでした。お金がありませんでしたので、男子寮に入り、アルバイトもよくしました。家庭教師は4年間続けましたし、夜には那覇港で係留船のロープの見張りをするウォッチマンというアルバイトなどもよくやりました。その際には、外国船から残飯（といっても当時としてはかなりのご馳走）をもらって食べることができました。大学の授業料は年間10ドル、寮費は3食込みで月6ドルだったと記憶しています。ともあれ、石垣島から那覇に出て大学生となり、充実した楽しい学生生活を送りました。

琉球大学の林学科には林政学の研究室はなかったので、研究室は森林経理学教室を選びました。当時の沖縄はまだ「アメリカ世」でしたが、陸軍省の奨学金をもらってアメリカ

*鹿児島大学大学院連合農学研究科

**琉球大学農学部

主な経歴

年	経歴
1941 年	沖縄県八重山郡石垣町に生まれる
1966 年	琉球大学農家政工学部林学科卒業
1968 年	九州大学大学院農学研究科林業学専攻修士課程修了
1971 年	九州大学大学院農学研究科林業学専攻博士課程中退 琉球大学農学部林学科 講師
1973 年	琉球大学農学部林学科 助教授 長期内地研修 (10 カ月：九州大学)
1974 年	農学博士号取得 (九州大学) テーマ「東南アジア諸国林野制度の比較制度史的研究」
1976 年	長期在外研修 (1 カ年：東南アジア・オセアニア 6 カ国)
1988 年	琉球大学農学部林学科 教授
1989 年	第 10 回沖縄研究奨励賞 (社会科学部門) 受賞 研究課題「亜熱帯地域の沖縄林業の歩み」
1991 年	鹿児島大学大学院連合農学研究科 主指導教官
1996 年	第 40 回沖縄タイムス賞 (社会奉仕賞) 受賞 受賞理由「戦時マラリア補償問題解決に尽くした功績」
2004 年	琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター長
2007 年	琉球大学名誉教授

に留学できる制度がありましたので、卒業後はこの制度を利用してアメリカの大学院で勉強を続けようと考えていました。当時は「日本」にどんな大学があるのかも知らず、また、本土に渡って林政学が勉強できるとは思っていませんでした。そうした中で、4 年生になる頃に森林経理学研究室の砂川季昭先生 (宮崎大学ご出身) から、福岡にある九州大学には塩谷勉先生という林政学の著名な教授がおられるので、そこへ行って勉強してはどうかと勧められました。

砂川先生のお取りはからいで塩谷先生と手紙で連絡を取ることができ、そこで教えていただいた島田錦蔵先生の『林政学』を購入しました。手紙には「成績が悪ければ入学させられないので、しっかり勉強するように」とありましたので、島田先生の教科書を半年間で 5 回読んで大学院入試に備え、何とか合格することができました。入試では特に英語の成績が良かったようで、入学早々に塩谷先生に褒められたことを覚えています。実は、九州大学の試験のほうがアメリカの大学院への願書提出よりも時期的に早かったことで日本の大学院に進学することになったわけですが、結果的には良かったと思っています。

九州大学での大学院時代は、日本政府国費留学生という立場で授業料の免除と奨学金をもらっていました。研究室には、同級生に行武潔さん、1 学年上に野口俊邦さんがおられ、よく一緒に勉強や議論をしました。少し上の学年には笠原義人さんや助手の堺正紘さんもおられました。研究テーマについては、塩谷先生から「君は南の沖縄から来たので、南方のことをしたらどうだろうか」と言われましたので、東南アジアにおける植民地開発と林業問題をテーマに選びました。

当時の九州大学ではマルクス経済学をやる人がほとんどでしたが、将来的に「アメリカ世」の沖縄に戻ることを考えるとマルクス経済学を勉強していたのでは就職がおぼつか

いということで、近代経済学を勉強しようと決めました。ヌルクセやミュルダールの経済発展論などを猛勉強しましたが、長い植民地時代を経験した東南アジア諸国の研究をするに足る分析ツールが近代経済学にはなかったので、周囲の影響もあって結局マルクス経済学の勉強も並行してすることになりました。

修士論文では東南アジアにおけるイギリス帝国主義経済の森林開発の歴史を分析しました。その成果は、塩谷勉編『東南アジア林業の展開』（1969）において、第4章「タイ国の林業とチーク」、第5章「ビルマの林業とイギリス林政の展開」、第6章「マレーシアの林業の展開と動向」として発表することができました。修士論文の研究主題は、イギリス帝国主義経済における植民地開発の論理が、東南アジアの植民地林野にどのように展開していったかの過程を明らかにすることでした。

博士論文ではさらに分析の対象を広げ、第2次世界大戦前の東南アジア諸国における各宗主国（イギリス、オランダ、フランス、アメリカ）の植民地ごとの林野制度の発生と発展過程を比較制度史的に明らかにし、それぞれの独自性（異質性）と共通性（一般的性格）の解明に取り組みました。

なお、こうした東南アジア研究を進めるに際しては、萩野敏雄さんにとってもお世話になりました。塩谷先生からのご紹介で当時林野庁にお勤めの萩野さんと東京でお会いすることができ、それ以降あれこれと親切にご指導を賜りました。最初は萩野先生とお呼びしていたのですが、「篠原君、僕は先生ではないから先生と呼ぶのはやめてくれ」とおっしゃるので、それ以降は萩野さんと呼ばせていただくようになりました。比較制度論で博士論文を書くようにご指導いただいたのも萩野さんであり、当時ほとんどいなかった博士課程単位取得退学後3年以内に博士号を取得できたのも萩野さんのお陰だと感謝しています。

また、在学中の1968年には箱崎キャンパスに米軍のジェット機が墜落するという事故がありましたが、あの時は学生たちに混じって学長まで参加されて博多駅までデモ行進するなど大騒ぎだったのを覚えています。当時はまだ本土にもたくさん米軍基地があったんですね。ともあれ、九州大学にいた5年間はアルバイトをする必要もなく、好きな勉強に没頭できた時期でした。ここでも楽しい学生生活を過ごすことができました。

琉球大学に奉職して

沖縄が本土に復帰する前年の1971年に琉球大学に戻って講師に迎え入れられました。当時は九州大学でもオーバードクターの問題はありましたので、私の場合は非常にラッキーでした。翌1972年の本土復帰に際して琉球大学は国立大学となり、本土の大学に合わせた体制をつくるための特別な予算措置もあって組織の拡充を図ることができました。学生定員も増え、本土から不足する科目の教授を招聘する措置などもありました。林政学の研究室ができたのもそうした時代背景の中でのことでした。

林政学の特別講義のため、当時すでに東京大学を退官されていた島田錦蔵先生に3カ月間滞在していただいたこともありました。さらに、林政学教室の教育・研究体制を強化するため、九州大学の黒田迪夫先生をお願いをして、隔年で5回にわたって当時教務職員だった仲間勇栄さんの学位論文の指導を兼ねてご来沖いただいたと記憶しています。この当時は本当に予算には恵まれており、研究や教育に関して必要な経費を要求すれば、だいたいお金をつけてもらえたというような具合でした。お金には不自由しなかった時代でした。

研究面では、東南アジアに加えて沖縄ならびに南西諸島における林業にも焦点を当てることとなりました。まず、東南アジア研究に関しては、博士論文では文献研究ばかりで現地を見ていなかったの、文部省の在外研究員制度を利用して1976年10月から1年間

かけて東南アジア（フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア）ならびにオセアニア（オーストラリア、ニュージーランド）の6カ国をめぐるしました。当時は、在外研究員制度で途上国行きを希望する研究者などいませんでした。

フィリピンではフィリピン大学に4カ月滞在しましたが、独裁色を強めるマルコス大統領が戒厳令を敷いていた時期だったことに加えて衛生状態も良くなく、無事に帰国できるかどうか分からないというような怖い思いもしました。タイではカセサート大学に1カ月、マレーシアではプトラ・マレーシア大学に1カ月、そしてインドネシアではボゴール農科大学に4カ月滞在しました。さらにその後、キャンベラのオーストラリア国立大学とニュージーランド南島のカンタベリー大学にも行きました。

当時の林政学研究者の間では東南アジアの研究者はほとんどいなかった（戦前には東南アジアだけでなく南洋や満洲・樺太などの研究も数多くありました）、私が訪ねた大学の林学部ではどこも私が初めての日本人来訪者ということで歓迎されました。何よりも、自分の目で各国の現場を見ることができたのは非常に有益でした。そして、これを機会に東南アジアだけではなくその周辺諸国にも目を向けた研究をするようになりました。帰国後、博士論文の研究内容とこの在外研究の成果に台湾やパプアニューギニアの林業事情を加えて、『東南アジア・オセアニアの林業』（1981）として出版することができました。

文献収集の面では、琉球大学に戻ってからも萩野敏雄さんには大変お世話になりました。上京した折にはよく神田の古書街に連れて行っていただき、アジア林業関連の貴重な研究書を手に入れることができました。今から思うと隔世の感がありますが、当時は戦後の高度経済成長期であり、東南アジアの研究などに興味を持つ者などほとんどおらず、戦前の貴重な書籍や資料類も神田では二束三文で売られているといった状況でした。

さらに、今なら問題になるかもしれませんが、萩野さんが集めておられた文献・資料や林野庁等の図書室で借りた文献を、萩野さんの名前を使って林野庁内でこっそり昼休みに大量にコピーさせていただきました。また、ちょうど野口俊邦さんが林業経済研究所におられたので、古本探しに付き合っていたいただいた上に体力のある野口さんに段ボールいっぱいの荷物を運んでもらうこともありました。そして、晴海埠頭から船で沖縄に帰りました。なお、萩野さんには1981年6月と1985年6月の2回（1回目は大学院、2回目は学部）、琉球大学の集中講義に来ていただくことができました。

研究の幅を広げる

アジア研究については、その後もさらに地域を拡大して続けました。文部省の科研費やJICAの調査費を得て、行きたかったインドやカリマンタンにも行きました。また、実際には行けませんでした、パキスタン、スリランカ、ベトナム、ラオス、カンボジアなどの諸国の資料を集めたり、向こうの大学の先生と連絡を取りあったりもしました。日本は熱帯木材の大量輸入国ですが、環境問題や貧困、人口増加など様々な問題を抱えるこれらアジア諸国において天然林の大規模な伐採が続けられている現状を目の当たりにして、健全な林業の発展に寄与するような調査研究の必要性を痛感しました。今から思えば、当時は東南アジア林業の研究が今日のようにこれだけ盛んになるなどとは想像もできませんでした。

また、若い頃の林業経済学会との関わりで思い出すのは、当時ほとんどの研究者がマルクス経済学に傾倒されていた中で、近代経済学的手法を使って林政学分野の研究を進めようという有志が集まって「近代林業経済研究会（仮称）」を立ち上げようという動きに参加したことでしょうか。これは、京都大学の岸根卓郎先生が主導され、林業試験場の野村

勇先生、熊崎実先生、宮崎大学の行武潔さんなどと一緒に、統計学的手法を用いた林業経済分析を広めていくという趣旨で始まったもので、何度か研究会設立のための打合せ会議を開いた記憶があります。ただ、その後の記憶がはっきりしないのですが、十分な会員数が集まらなかったか何かの理由で自然消滅したように思います。今でも、九州大学の大学院博士課程にいた時に岸根先生の集中講義を受け、計量経済学的重要性を強く認識したことを覚えています。残念ながら私自身は、その後そうした研究をすることはありませんでしたが。

沖縄および島嶼地域の林業研究に関しては、琉球王朝時代の名宰相蔡温^{さいおん}の『林政八書』の研究をはじめ、林野制度、林業生産と流通の歴史、森林保護問題などに取り組みました。蔡温の研究は、私の卒業論文のテーマでもありました。さらに、奄美群島や屋久島・種子島等の南西諸島を構成する島嶼地域における林業の特徴や問題点を研究しました。その成果として『亜熱帯地域の沖縄林業の歩み』（1984）を出版しました。

さらに、沖縄林業を考える上では国内他地域の島嶼部における林業問題を分析することが重要であるとの認識に立ち、対馬、五島列島、壱岐、隠岐、佐渡、八丈島などの研究にも着手しました。実は、九州大学に入って最初に現地調査を経験したのが、全国で最初に造林公社を立ち上げた対馬でした。この時は塩谷先生が、日本の林業を知らない私に山を見せようと連れて行ってくださったもので、農山村における入会問題や拡大造林の現状について学ぶ良い機会となりました。しかし残念ながら、これらの島嶼研究についてはまだまだ道半ばというところで定年を迎えてしまいました。

また、沖縄県との関係では『沖縄県農林水産行政史 林業編及び林業資料編Ⅰ・Ⅱ』という3部作の編纂に携わったことが良い思い出です。これには、当時助教授でその後私の後任となった仲間勇栄さんも関わってくれました。沖縄の林業とその歴史について、実は私はそれほど多くの研究をしたわけではありませんが、仲間さんは林野制度利用史や蔡温の思想研究など幅広く琉球および沖縄の森林問題の研究を続けられました。

沖縄戦におけるマラリア犠牲者の問題

大学の研究以外のことになりますが、1980年代後半から1990年代にかけては戦時中の八重山地域におけるマラリア犠牲者に関する活動に力を入れました。米軍の上陸が想定された沖縄戦時に、日本守備軍の命令で一般住民は石垣島と西表島の山間部に強制的に避難させられました。ところが、そこは悪性マラリア（熱帯熱マラリア）の有病地だったことから、避難民は次々にマラリアに感染し、多くの死者が出ました。当時私は4歳でしたが、一緒に避難した母と姉と妹をマラリアで亡くしました。ほとんど記憶はありませんが、幼い妹が苦しんで泣いていたことや、避難小屋の前の地面に掘られた穴に埋められる母の遺体を眺めていたことなどを断片的に覚えています。というよりは、その情景や泣き声を忘れ去ることができないというほうが正確な表現でしょうか。

それまで私は、私の家族を含む島民は自主的に避難してマラリアにかかったと思い込んでいました。父も亡くなるまでそうした話は一切しませんでした。それが本を読んで軍の命令だったということを知り、さらに調べていくうちに3,000名を超える死者が出たこともわかりました。そうした事実を知ったことで大いに悩み、家族にも相談して了解を得た上で、私は行動を起こしました。犠牲になった人たちの名誉を回復するために、広くご遺族等の協力を得て「沖縄戦強制疎開マラリア犠牲者援護会」を1989年に結成し、国家補償を求める運動を始めたのです。これには相当のエネルギーを費やしました。

沖縄戦のさなかに沖縄本島から遠く離れた八重山諸島においても多くの尊い命が失われたことを忘れてはならないという思いからの運動でした。援護会が求めたのは戦傷病者戦

没者遺族等援護法に基づく遺族補償でしたが、国が認めたのは慰霊碑の建立と祈念館の設立などであり、1995年度に国の慰藉事業（3億円）として実現することができました。この功績により、第40回沖縄タイムス賞を受賞することができました。

一連の調査の過程で、戦時中に台湾南部にあった京都帝国大学の台湾演習林ではマラリアの特効薬キニーネの原料となるキナの樹の栽培を行っていたことを知りました。南方での戦争遂行に不可欠であったキニーネが不足し、国産化を図るために国策として取り組んだということでした。そして、石垣島でも軍はキニーネを備蓄していましたが、住民に配られることはありませんでした。八重山では戦後になってもマラリアが流行し、多くの人が命を落としています。

現在は定年から10年が経ち、もうあまり研究らしいことはしていませんが、この時に集めたマラリア被害者に関する膨大な資料や写真をまとめて著作物にする作業を進めているところです。沖縄には「命^{めう}どう宝^{たから}」という言葉がありますが、命を粗末にする戦争だけは決して繰り返してはならないと思っています。

若い人たちへのメッセージ

私は林業経済学会に対しては何も貢献してきたわけではありませんので、特にメッセージというようなものを言える立場にはないと思っています。むしろ、東南アジアや南アジアの研究がこれほど盛んになるとは考えてもみませんでしたので、若い研究者の皆さんの昨今のご活躍に驚いている次第です。

個人的には、行きたくても行けなかったミャンマー、ラオス、カンボジアなどのインドシナ諸国やパプアニューギニアなど太平洋諸国、そして台湾の研究も積極的に進めていただければと期待しています。また、オーストラリアについては、各州ごとの林業政策を詳しく調査し、砂漠地帯における植林活動の現況なども知りたいと思っています。沖縄については、西表島における林野利用の歴史等の調査研究などの課題が残されているでしょうか。

ふり返れば、私の研究人生は本当に良き師に恵まれ幸せなものだったと感じています。皆さんもそうした出会いを大切にしていきたいと思います。また、海外研究では安全の確保と健康の管理が重要ですので、十分に気をつけてください。林学はわりあい潰しのきく学問領域ですので、若い皆さんには大学で学んだことを生かし、社会に出て様々な方面に活躍の場を広げていただければと願っています。

参考文献

- 篠原武夫（1969）『東南アジア林業の展開』（塩谷勉編・共著）「第4章：タイ国の林業とチーク」「第5章：ビルマの林業とイギリス林政の展開」「第6章：マレーシアの林業の展開と動向」地球出版，100～216頁。
- 篠原武夫（1972）「東南アジア林野制度に関する研究：その課題と方法について（1）」林業経済，No.281：13-19。
- 篠原武夫（1972）「戦後アメリカ統治下の沖縄県林業（上）」林業経済，No.287：1-37。
- 篠原武夫（1972）「戦後アメリカ統治下の沖縄県林業（下）」林業経済，No.288：1-8。
- 篠原武夫（1973）「沖縄県の森林・林業の特性と林政の方向」林業経済，No.298：1-15。
- 篠原武夫（1974）「現下の沖縄県における森林乱開発と自然保護」林業経済，No.310：1-12。
- 篠原武夫（1976）「沖縄県林政の課題」林業経済，No.329：21-31。
- 篠原武夫（1980）「南西諸島における保安林制度の特質に関する研究」林業経済，No.383：16-28。

- 篠原武夫（1981）『東南アジア・オセアニアの林業』地球社，320 頁。
- 篠原武夫（1984）『亜熱帯地域の沖縄林業の歩み』琉球林業協会，128 頁。
- 篠原武夫（1988）『新・東南アジアハンドブック』（滝川勉編・共著）「林業の現状と課題」講談社，339～354 頁。
- 篠原武夫（1989）『沖縄県農林水産行政史第 7 巻（林業編）』「第 1 章：明治・大正期」「第 2 章：昭和戦前期」農林統計協会，3～57 頁。
- 篠原武夫（1991）「島嶼の林業振興と森林組合の役割に関する研究」琉球大学農学部学術報告，38：61-75。
- 篠原武夫（1993）「沖縄の造林の起源と蔡温の林政思想」林経協月報，No.387：17-23。
- 篠原武夫（1994）「本土復帰後の沖縄の米軍基地と森林問題」林業経済，No.548：12-21。
- 篠原武夫（1997）「最近のフィリピンの林業生産と木材輸出」林経協月報，No.435：2-19。
- 篠原武夫（2000）「最近のタイの林業生産と木材輸入」林経協月報，No.471：2-21。
- 篠原武夫（2003）「最近のインドネシアの林業生産と木材輸出」林経協月報，No.506：2-26。
- 篠原武夫（2004）「沖縄県の特産林産物の生産・流通に関する研究」琉球大学農学部学術報告，51：22-31。

（文責：前田千春・大田伊久雄）